

目的を実現するために、必要感をもって学び、未来を拓こうとする子ども

－ ESD の考え方を取り入れ、教科等横断的な視点で組み立てた

単元構想の開発・実践を通して－

福島市立森合小学校 教諭 渡邊 明伸

1 研究の趣旨

AI技術の台頭、超高齢社会、頻発する自然災害、そして新型コロナウイルスのような感染症リスク……。目の前の子どもたちが活躍する近未来では、身の回りに生じる様々な問題に自ら立ち向かい、その解決に向けて異なる多様な他者と協働して力を合わせながら、それぞれの状況に応じて最適な解決方法を探り出していく力をもった人材が求められている。

本校では、新学習指導要領の移行期間である令和元年度から、問題解決の力を育むことに適した生活科と総合的な学習の時間を中核とし、本校として育成を目指す資質・能力を明確にして、教科等横断的な視点で単元構想の開発を行い、実践を積み重ねることで、「未来の創り手」である子ども一人一人に「生きる力」を育みたいと考え、本研究をスタートさせた。

そこで、本研究では、以下の仮説を設定した。

生活科・総合的な学習の時間を中核とし、ESDの考え方を取り入れて教科等横断的な視点で組み立てた単元構想の開発・実践を行えば、目的を実現するために必要感をもって学び、探究的な学習を通して資質・能力を身に付け、未来を拓こうとする子どもが育成されるであろう。

2 研究の概要

(1) 育みたい資質・能力

本校では、子どもたちに育みたい資質・能力を学習指導要領の内容と、求める子どもの姿を基に自校化し、「もりあいの力」と名付けた。

も	問題を見いだす力	り	理解、納得するまで探究する力
あ	相手に伝える力	い	意味を振り返る力

(2) 「もりあいの力」を育むための手だて

○ 問いの焦点化

子ども一人一人の「知りたい」「調べたい」「もっとよくしたい」という思いを基に、仲間と共に深く思考する必然性のある「問い」を見いだし、共有することができるようにする。

○ 方法の焦点化

問いを解決するために必要な「人・もの・場・情報」や、調べたことを表現する方法を、選択したり考えたりすることができるようにする。

○ 見方・考え方の焦点化

各教科等の本質に迫る「見方・考え方」を用いて解決する必要のある場面や文脈を位置付け、資質・能力を高めることができるようにする。

(3) 教科等横断的な視点で組み立てた単元構想の開発

学年のどの教科等において、どのような資質・能力の育成が図られるかを精査し、生活科・総合的な学習の時間と他教科等の双方にとって互恵的な学びが深まるよう考慮して単元構想した。また、6年間を通した共通のテーマ「わたしたちのふるさと森合」を掲げ、ESDの視点を取り入れた単元構想をすることにより、子どもが地域の実態から問題を見いだし、持続可能な社会の構築に向けて自分たちができることを考えながら探究する過程で、「もりあいの力」を育成できると考えた。

3 成果と今後の課題

(1) 研究の成果

○ 前時までの学習や生活経験を振り返ったり、事象との出合いを工夫したりする「問いの焦点化」により、まだ分からないことや、もっと工夫できそうなことなどが明らかになり、問いを共有することができた。

○ 子どもが問題を解決するために必要な解決方法や情報収集の手段、まとめ方などを教師が想定しておく「方法の焦点化」により、子どもの主体的な問題解決につながった。

○ 生活科と総合的な学習の時間を中核とした大単元構想をし、各教科等の見方・考え方を働かせる場を設定する「見方・考え方の焦点化」により、子どもは教科等横断的に学ぶよさを実感しながら、教科と生活科・総合的な学習の時間双方の学びを深めることができた。

(2) 今後の課題

○ 生活科・総合的な学習の時間を中心とし、教科等横断的な視点で構想した単元は、長期間にわたって探究することになる。その間、子どもの意欲が途切れられないような「学習の動機付け→問題解決→学びの振り返り」のサイクルを考えていく必要がある。